

佐賀の果樹 1月号 今月の管理（病虫害防除）

生育期間の病虫害による被害の発生を減らすためには、冬場に伝染源等を除去することが重要です。2018年産の果実が高品質なものになるよう、冬場にできる対策をしっかりと行いましょう。

果樹類全般

○伝染源の除去

カンキツの黒点病は枯れ枝、カンキツかいよう病は枝・葉の病斑、カキの炭疽病・ナシの輪紋病は罹病枝の病斑、ナシの葉炭そ病や黒星病、ブドウのべと病などは落葉が「伝染源」となります。つまり、前年これらの病害が問題となった園地には病原菌が残っており、そのままにしておくと春先からこの伝染源からふたたび病気が広がり、大きな被害を引き起こす可能性があります。

病害発生の元となる伝染源がたくさん残っているには生育期間中の薬剤防除を一生懸命行っても、防除効果があがりにくくなってしまいます。病害の発生を抑えるため、今のうちにこの伝染源を除去することが重要です。そのためには常緑果樹、落葉果樹ともに被害枝・葉の除去、せん定くずを園外へ持ち出すなどの処分を行い、加えて落葉果樹では落葉処理や粗皮削りを行って園内にある伝染源を減らしましょう。

○防風樹の手入れ

防風樹は、果樹園を強風から守るものですが、手入れを怠り通風が悪くなりすぎると、園内に湿気がこもり、病害が発生しやすくなります。防風樹は適切な刈り込みや枝の整理を行い、園内の風通しを改善しましょう。ヒノキ・スギの防風樹の場合は、カメムシ類の増殖源となる毬果が結実しないように刈り込みます。

作物の管理が忙しくなると防風樹まで手が回らなくなるので、今のうちに必ず行って下さい。

露地カンキツ

○貯蔵中の果実腐敗対策の徹底

貯蔵中は、こまめに果実の状態を点検し、腐敗果を見つけたらすぐ取り除きます。また、取り除いた果実は貯蔵庫内に放置せずに必ず持ち出し、土中に埋めるなどして処分しましょう。

今月は中晩柑の収穫時期です。収穫の際は果実を丁寧に取り扱い、果実に傷がつかないようにして、腐敗果の発生を防止しましょう。

○カイガラムシ類・ミカンハダニ対策にマシン油乳剤の散布

冬期のマシン油乳剤散布は、ヤノネカイガラムシやフジコナカイガラムシ等のカイガラムシ類に対し効果が高く、加えてミカンハダニも防除できます。1月上旬までにマシン油乳剤 97%60 倍を散布して下さい。その際、主幹部や葉裏、枝葉の込み合った部分などまで薬液が十分かかるよう、丁寧に散布することが大切です。

ただし、厳寒期は落葉の発生を助長させる恐れがありますので、1月上旬までに散布できなかった場合は3月上旬にマシン油乳剤 97%を 80 倍で散布しましょう。なお、樹勢が低下している樹への散布は控え、生育期の殺虫剤の散布で対応して下さい。

ハウスミカン

○ミカンハダニ対策

ハウス栽培ではミカンハダニが増えやすく、一度増殖してしまうと抑えることが困難なため、防除が遅れないようにします。ビニル被覆以降は、発生しやすいスポットを中心に日ごろからよく観察し、発生が認められたら直ちに防除を行きましょう。

また、ハウス栽培ではミカンハダニの殺ダニ剤に対する感受性の低下が問題となっています。殺ダニ剤の使用回数を減らすため、幼果期(果径 25 mmまで)まではマシン油乳剤 97% 200 倍の単用散布で対応します。ただし、生理落果助長などの問題が起こらないよう、マシン油乳剤の散布は天気の良い午前中に行うことや散布後は換気等を行い樹体の乾燥を促すこと、樹勢の低下している樹には散布しないことなどに気を付けてください。

○灰色かび病対策

落弁期にナリアWDG2,000 倍等の殺菌剤にトルキャップ 1,000 倍を加用して散布します。灰色かび病は落弁期の花弁に発生するため、こまめに枝を揺するなどして花弁を除去し、本病の発生を減らしましょう。湿度が高いと灰色かび病が多発するため、循環扇等を利用して空気の流れを作り、湿度が溜まらないようにして下さい。

ナシ

○白紋羽病対策

生育期に発病した樹とその周辺の樹に対し、フロンサイド S C 500 倍(発病樹)、1,000 倍(未発病樹)のかん注処理を行います。1 樹あたりの処理量は、100 ℓを目安とし、ムラなくたっぷり処理を行きましょう。

本処理の効果は二年程度持続しますが、それ以降は再発する場合もあるため、根部を掘って発病が進んでいないかチェックし、発病が進んでいるようであれば再び処理して下さい。

○粗皮削り

粗皮削りは、カイガラムシ類やシンクイムシ類などの粗皮下で越冬する虫に対して有効

です。ただし、フタモンマダラメイガが発生している園では、形成層近くまで削ってしまうと後々本種が寄生しやすくなり被害が大きくなってしまうため、削りすぎないように注意してください。

キウイフルーツ

○かいよう病対策

かいよう病は冬季の対策が重要です。かいよう病が未発生、既発生にかかわらず、IC ボルドー66D 50 倍等の銅剤を用いて防除を行いましょう。特に剪定等の樹体に傷がつくような作業をした後は必ず切り口にトップジン M ペーストを塗布するとともに銅剤による防除を実施します。

剪定等の作業は、かいよう病が発生していない園、発生していない樹から始め、使用するはさみやノコは樹ごとに 70%以上のエタノールまたは 0.02%以上の次亜塩素酸ナトリウム水溶液で消毒します。

枝や幹からかいよう病によると思われる白色～赤褐色の樹液の漏出がある場合は、発見次第早急に切除してください。なお、切除した枝は土中に埋めるなど適切に処分してください。

○クワシロカイガラムシ対策

クワシロカイガラムシの発生が多い園があります。冬季の越冬虫対策を行うことで生育期間中の発生を減らすことができます。マシン油乳剤 95%14 倍を散布して下さい。ただし、マシン油乳剤の散布を行う場合は、かいよう病対策のための銅剤散布との間隔を 2 週間以上空けてください。

カキ

○フジコナカイガラムシ対策

昨年フジコナカイガラムシの発生が多かった園は、越冬量も多いと考えられます。本虫は粗皮下などのすきまで越冬するため、粗皮削りを行って越冬量を減らします。また、地際部の粗皮下でも越冬しているので、この部分まで丁寧に粗皮削りをして下さい。